



## ティー・ブレイク

NO.77

### 人間を見ること

生命の探求が遺伝子レベルにまで来ている昨今では、医学の進歩も著しい。この「医学の進歩」に対して、まさにそれ自体に対しては異論を唱える気などは全くないのであるが、一部には、「医学の進歩に伴って、現場の医師が冷たくなってきたような気がする」という声も聞かれ、特にこのあいだ「言い得て妙」と思ったのは、「最近の医者は、病気は診るが、病人は診ない。まるで実験動物であるかのように、患者を扱う」という老医師の言葉を聞いたときであった。

我々の業種でも、あるタイミングで、発明の内容を的確に捉えることと発明者からの的確に情報を引き出すことの相違、出願手続を円滑に行うことと出願人にほどよく接することの相違、について教えることが肝要であり、その指導がうまく行くかどうか、彼を単なる工業所有権書類の代書屋にするか、或いは、いわゆる世間一般から期待され、求められている人物像としての弁理士にするか、の分かれ道になることもある。

そして、こうした指導の際には、世の中には多くの矛盾が存在するという事を説明しつつ、正しいことが必ずしも良いことではないということ、身をもって分からせるようにする必要がある。加えて、後者の点については、正確な情報を適切に伝達することが使命でもある我々の職業にとつては、特にその按配が難しいということについても言及する必要がある。

特に独立開業を目指している者に対しては、それぞれ身勝手なことを考えている人々の集団を纏め上げ、統率していく方法論を教えねばならず、そのためには相手が真に望んでいるものを的確に把握して適切な応えをする手法を体得させる必要があり、それが会得出来るか否かという際には、彼が相手の中の「人間」というものをきちんと見ようとしているかということが重要なファクターとなってくる。

ところで、私の知っている秀人君は実は養子であった。彼の養父は、そのことを知らせておらず、秀人君は自らを実子だと思って疑っていない。周囲の何人かは「正しいことを教えるべきだ」と勧めたが、養父は「一人でメシを食って行けるようになるまで」と拒絶した。

そうした秀人君は、不幸にも交通事故に遭い、絶命してしまった。後日、周囲の何人かは「実の親の顔も知らないまま・・・」とその真相を知らずにあの世に逝ってしまったことを哀れんでいたが、事故の当日、秀人君が運ばれた病院には、生みの親も駆けつけた。

到着早々、生みの親はどんな状態であるかとの状況説明を看護婦に求めたのに対し、養父は、集中治療室から出てきた主治医に向かって「秀人は、秀人は苦しんだんですか」とだけ叫んだ。医師は、「即死でしたから、痛みなど感じる間も無かったと思います」とただそれだけ答えた。

まさに、本当の親と人間を診た医師の言葉であった。

(正)